

第零話

ぼつんと佇む木造二階建ての建物。細工の施された美しいガラス戸は開けるたびにガラガラと音が鳴り、店内には古めかしい紙のにおいが充満している。二階まで貫かんとするほどの高さのある、壁と一体化した本棚にはびっしり所せましと色々な本が陳列されている。文庫本に単行本、百科事典に図鑑まで……小さな外見からは想像もつかない蔵書を誇るこの古本屋。

ここには、変わったお客さん————成仏できなかった幽霊さんたちがやって来ます。

天国でも地獄でもない。本に関する未練を残した人たちが、死に切れぬままその未練に導かれやってくる。

そんな古本屋、『日高書店』。

切り盛りするのはこの店の看板娘で店主、「日高聖」ただ一人。

肩のあたりまで伸びた後ろ髪は綺麗に整えられ、目許には知的にも見える丸眼鏡が光を屈折させ、淡いカーディガンを羽織った若店主。店の奥に見える番台のようなカウンターに腰掛け、飽きもせず店の文庫本に目を落とす、原稿用紙をカウンターに準備し、今日も今日とてお客さんを歓迎する。

ガラガラガラ……バンッ……

「ふう……」

古く重たい引き戸を開けるとガラスが音を立てて、今日もお店が開かれた。

第一話

私、「日高聖」は今日も今日とて古本屋、「日高書店」の番台に座っていた。

ここは天国でも地獄でもない、生死の狭間にぼつんと軒を構える古本屋。店にある無数の本の中から面白そうな小説を引っ張り出して店番をしながら読みふける毎日。

私の本をめくる音だけが響くこの店内に、ガラガラガラ……ガラス戸が開く音が響いた。

「こ、こんにちは」

「いらっしやい」

文庫本から目を離すと、店の前にはまだ若い、スーツを着た男性が立っていた。風貌から社会人四年目のサラリーマンってところだろうか。

サラリーマンさんは店の壁一面に埋まっている本を見上げて驚き慄いていた。

外から見たらただの小さな二階建ての古本屋さんだけど、中を見ればレールでつながった専用の梯子を使わないととれないような高さまで本がびっしり埋まっている。驚くのも無理はない。

「何かお探ですか？」

何かは分からないが、何かを探している様だったので尋ねてみた。

「あ、いえ、ここに来る直前に読んでた本、あったりしないかなって」

「ここに来る、直前ですか？」

つまり、死ぬ間に読んでいた本ということだ。

「ええ……なんとなく感覚で分かるのですが……俺はもう生きてはいないのでしょ？」

ひどく落ち着いた様子で、サラリーマンさんは自分の死を確かめた。

「包み隠さず言えば、そうなります」

「ですよ。妙に身体は軽いし、さっきまであんなに怖い状況に置かれていたのに頭はずごく澄んでるし、思い出しても怖くもない、まるで他人事みたいで……死ぬのが怖くないのは、もう死んでいるからですよね」

自分の死を微笑みながら伝えるサラリーマンさんに私は頷きだけ返した。

「俺には妻子もないし、両親にも返せるものは返したつもりです。悔いなんてないと思つてただけど……まさか直前に読んでいた本の続きが気になるだなんて」

サラリーマンさんは、今度はおかしくて笑いを堪えられないと言った雰囲気です。笑い出した。

「案外そういうものですよ。ここに来られる方たちは」

「へえ……なんかあつけないですね」

この人の死因は後に分かるのだが、通勤途中の電車での脱線事故だ。

満員電車だったこともあり、横転した車両の中で窒息し、人の重さで圧死。考えたくもないような死因のはずなのに、等の本人は「あつけない」って言葉で締めくくった。

「それで、タイトルの方は？」

「ああ、そうでした。えっと——」

タイトルを覚えてくれたサラリーマンさんは茶化すように言葉を続けた。

「結構新しめの作品なんですけど」

「ありますよ」

「え？」

たしかに新しいタイトルだ。まだ出版されて半年も経っていない。

だけどそんな本でもあるのがこの日高書店だ。

私は番台から出て、梯子の位置を調節、軽快に登っていく。

「ええっと、たしか……」

背表紙の記憶と、配置の記憶をたどって梯子に足を掛けながら本を探す。

「あ、ありました」

すると案外すぐに見つかった。水色の背表紙の本を手に取り、なれた手つきで梯子を下る。

一応、手渡す前に簡単に埃を払ってからサラリーマンさんに見てもらおう。

「こちらですよね？」

「ああ、すごい！ これですこれです！」

サラリーマンさんはうれしそうに私から本を受取った。

少し自然風と空気にさらされて新品同様とはいかないが、読むだけなら全く問題はない。

「これほんとに最近出たばかりの本なのに、よくありましたね」

「ふふっ、見つかってよかったです」

口元を手で押さえて軽く笑ってはぐらかした。

サラリーマンさんは受け取った文庫本をあまりに大事そうに抱えていた。

「俺、電子で読んでたんですけど、紙だとこんな感じなんですわね」

「たまには紙もいいですよ」

「あの、これ」

「もちろん読んでもらって構いませんよ」

興奮冷め止まぬサラリーマンさんに、私は番台の裏からスツールを持ってくる。

「わざわざありがとうございます」

「いえいえ本を読むための古本屋ですから……あ、コーヒーかお茶、どちらがいいですか？」

「え？ そんな、悪いです」

「私も飲むので、ついでです」

「……でしたら、コーヒーを」

「はこ」

私は番台の裏の暖簾をくぐって、完全に私個人の居住スペースに入る。コーヒー粉の入

った瓶を開け、二杯分すくいドリップする。ちゃんと紙フィルターで淹れたコーヒーだ。酸味よりもキリツとした苦味の強い私好みのコーヒーが二杯できあがった。

マグカップとソーサーを邪魔しないようにサラリーマンの隣に置く。「ありがとうございます」とお礼を言われたので、簡単に会釈だけ返し、私は私で番台に戻り、読みかけの文庫本に手を戻しながら一口コーヒーを啜って、読書の時間に戻った。

しばらくするとサラリーマンさんの方からボタンと本を閉じる音が聞こえました。

ちらりと視線をやると文庫本を片手に持ちながら伸びをしているサラリーマンさんが見えました。コーヒーも飲み切っていた。

「いやあ、ほんとにスッキリしました」

「それはよかったです」

声をかけられたので私も葉を挟んで文庫簿を閉じます。

「どうでした？」

私は何気なく感想を聞きました。彼の頭の中では今読み終えた小説のことでもいいでしょうから。

「うーん………正直に言えば、あまり肌には合わなかったです」

「あら、それは残念」

まさかの酷評でした。

「本筋は面白かったんですけど、文章構成がどうも苦手で……でもまあ続きは気になるので読み進めたんですけど、ずっと癖のある文体に集中力を削がれていたというか、なんというか」

こればかりはどうしようもない。それが味になる事もあれど今回のように雑味になることもある。だからこそ全員が気に入る本なんてこの世に存在しない。だからこそ、面白いし、勉強になる。

「あと、キャラクターも、嫌われ役がほしいのは分かるんですけどもうソイツがほんとクソで、俺にはそれがいいとは思えませんでしたね。ヒロインにナンパするところなんてもうほんとに——」

サラリーマンさんは肌に合わなかったと言っておきながら饒舌に感想を口にしてくれました。こういう人の本の感想を聞くのが私はたまらなく好きでした。

「あ、すみません、自分ばかり」

「いえ、本を読み終えたすぐってのは誰だって人に話したいものです。せつかくここにいますから、お話くらい聞きます」

「そう言っていたけると助かります……はあ、これが俺の読書遍歴最後の一冊か」

サラリーマンさんはどこか落胆しながら自嘲気味に笑って見せました。

「何か他のも読みますか？」

幸いここは古本屋です。本だけはたくさんあります。

「いえ、もう大丈夫です」

そう言うとサラリーマンさんはスツールから立ち上がり、まるで何かを確かめるように拳をグーパーと何度か握りました。

「あ」

するとサラリーマンさんの身体から光の粒子のようなものがぽつぽつと沸いてきました。何度も見たことのあるこの光景。ここに来た人が未練を無くし、無事に成仏するときに出る粒子です。サラリーマンさんからその粒子が出ているということは、この人は死に際に読んでいた本を読めて未練を全て無くされたのでしょうか。

「コーヒー、ありがとうございます。あと、紙の本もいいですね」

「たまにはいいですよ」

また来てください。なんて言えるわけもなく、天国にも紙の本があることを密かに願う。

「あ、そういえば」

サラリーマンさんは消え入る間に、何か思い出したかのようにこちらを見て言った。

「あなたはどのようにしてこんなところで店番をやっているんですか？」

第二話

今日も今日とて、いつものようにカウンターには原稿用紙を広げながら、文庫本を静かに読んでいたのですが、今日はそんな静かな店内にガランツ！ と大きな音が響きました。

「ここは本屋か！」

入口に目をやると、ガラス戸を勢いよく開けた七十代ほどを見られる男性がそう大きな声で叫びながら立っていました。

「え、ええ、そうですが」

「探しとる本がある！」

おとうさんははずけずけと店内に入って来て私の前に立ちます。

「ど、どのような本ですか？」

思わず私も背筋が伸びます。見るからに頑固親父って感じの風貌で、眼光も鋭く言葉も大きく大雑把です。

「白い文庫本だったのは覚えとるが、内容もタイトルも分からん！」

「えええ……」

思わず気の抜けた声が出てしまった。こんな大雑把なのは始めた。

「しよ、少々お待ちください」

一度店内を見回ったが、白い文庫本なんてたくさんあって全く絞れない。

「も、もう少し何か情報はないですか？ 小説だかと、エッセイだとか」

「わからん」

「しゅ、出版された年代とかは」

「知らん！」

もうどれだけ長い間この古本屋の番台に座っているかもう分かりませんが、はじめて泣きそうです。こんなに無謀な本探しは初めてです。

でもめげずに何冊か見繕ってお渡しして見ました。しかし全部違うとのこと。

とほほ……と途方に暮れそうになりました。

しかし、ずっと胸の中でくすぶっていた違和感に一縷の望みをかけて、徐々に苛立ちがみえはじめたおとうさんに勇気を振り絞って尋ねてみることにしました。

「あの、ご自身で読まれた本ですか？」

「ん？ 違う！ わしは本など読まん」

やっぱりそうだ。

別に今まで読んだ本全部を覚えているかと言われれば絶対にそんなことないし、記憶に残らない本もたくさんある。でも、死に際に未練を残した本に関してそれは少しおかしい。

すると案の定だ。このおとうさんは本を読まない。

じゃあなんでこんなところに？

その「白い文庫本」に未練を残しているんだ？

「その本はおとうさんご自身が読みたいから探している本ですよね？」

「当たり前じゃ」

日ごろ本を読まない人が死に際に焦がれて探すような本。

「どうして読みたいと思ったんですか？」

「どうしてじゃと……？ それが何の関係がある」

「皆さん読む本には理由があります。作家さんが好き、タイトルに興味を引かれた、今売れている人気な本だから、映画や漫画などのメディアミックスが面白かったから、知りたいこと、勉強したいことがある、表紙が良かった……なんだっていいんです。それを聞けば、どんな本かは多少絞れるかもしれません」

つい少し長く話してしまいました。

おとうさんはそれを聞いて少し黙ってから気恥ずかしそうに言葉を詰まらせました。

「……家内が、大切にしとったからじゃ」

「奥様が？」

「毎朝、わしが起きるまで、朝飯を作り終えてからの少しの時間に必ず読んどったんじゃ。家に一つしかなかった老眼鏡をかけて、起きたら新聞を読むわしに気を使って読むのをやめるんじゃ……いつだったか、どんな本なのか尋ねるといつもは静かな家内がものすごく饒舌に話とったのは覚えとるんじゃが、内容までは忘れてしもうた」

それまで高圧的だったおとうさんが嘘のようにしつぽりと奥様の話をしてくれた。

「……このまま天国で家内に会っても、あいつの好きなものの話の一つもできない」

なるほど。多分この方は、スーパーに一人で買い物に行っても奥様のことを気にして何かお菓子の一つでも気を使って買ってきてくれるような奥様にお優しい方なのだろう。

そして今度は、すでに亡くなられた奥様に会いに行くのに、奥様の好きだった本の一つも知らない自分がどうにもやるせないと感じたのだろう。だからここへきて、その本のことを知りに来たんだ。

そうと決まれば、私も全身全霊でそのお手伝いをさせていたただけだけだ。

「……奥様は、毎日「同じ」本を読まれていたのですか？」

「何十年も毎日欠かさずじゃ」

となると何度も読み返しても問題ない、むしろ読み返すことで面白さが出るような本なのではないかと推察できる。

そんな本のジャンルとしてミステリーがあげられる。

犯人やタネが分かってからもう一度読み返すと気づかなかった伏線や不審点などに気付いてそれはそれで面白い。私もたまにする。

しかし少しの時間とは言え毎日、何十年も一冊の本だけに集中するとは少し考えにくい。そしておとうさんと同じ年代の方だったら最新のミステリー小説は読まれないだろう。

そして白い表紙。

考えられる本を思い出した。

私は梯子を調節して、一步一步踏みしめて上る。白い背表紙が並んだ箇所、作者の名前を確認してから数冊ほど持って降りる。

「こちらじゃないですかね？」

そういつて手渡したのは、文庫本は文庫本でも、「全集」だった。

光文社から出ている「江戸川乱歩全集」だ。

「おおおおお！ これじゃ！ なぜこれじゃと分かった!？」

おとうさんは興奮した様子でここにきて初めて笑ってくれた。

「こちらの本、全集でして同じような表紙で何冊も出ていまして、端から見ても一冊の本と勘違いしてもおかしくないと思ったのもありますが……それよりも、ミステリーは何度読み返してもおもしろいですから、毎朝何度も何度も読んでおられてもおかしくないと思います、あとは山カンです」

「そうか……さすが店のもんはようわかっとる」

うれしそうな声から一変、おとうさんはその全集があった個所の本棚を見上げてため息をつきました。

「しかし、こう何冊もあれば簡単には読み切れん」

たしかに全部はさすがに厳しいだろう。文豪の一生を追うのだから。

しかしわざわざそんなことをすることはしない。

「大丈夫ですよ。一冊、いや一話だけでもいいと思います」

「たった一話でか」

「はい。毎日読まれるほど熟読されているのでしたら、一話だけでもお話しできるとたのしいと思いますよ」

「そういうものか？」

「そういうものです」

自分の好きな物語を、好きな人と話せるほどたのしいこともない。

このおとうさんもそのうれしさに気付けばいいなと一古本屋店員として思った。

そうしてお父さんは一冊手に取り、まるで何かを思い出すように表紙をまじまじと見つめ、やわらかい表情を見せました。

「これでやっと顔向けできる」

そのやわらかい表情は私にも伝播した。

私はスツールを持ってきて、おとうさんに座ってもらう。

「お茶かコーヒー、どうですか？」

「茶を」

「はい」

一度裏に戻り、急須に茶葉を用意し、少し熱めのお湯をゆっくり注ぐ。もちろん一番茶をおとうさんに差し出す。

「ありがとう」

と、おとうさんは一瞬本から視線を私の方に向けて私にお礼を言った。

お優しい方と分かっているけど、強面の方からの優しいお礼の言葉は少し胸に残ります。

お盆を胸の前にやり、邪魔しないように目だけでお礼を返しました。

しばらくすると、おとうさんは静かに息を吐き、光の粒子がおとうさんの周りに舞い始めた。

「そうじゃ」

おとうさんは私の方を見て目を丸くして言う。

「お前はなぜこんなところで独りなんじゃ？」

第三話

ピンポーン

「ハッ！」

今日も今日とて番台で一人、原稿紙にはペン先を立てずに文庫本を読みふけていたのだが、ふと背後からチャイムが聞こえて私は文庫本を勢いよく閉じ、暖簾の奥へ勢いよく走る。木造の床をドタドタ蹴りながら、裏口の扉を開ける。

「はい！」

そこにいる何かを信じて私は大きな声であいさつをするも、そこには誰もおらずただガムテープで封された段ボールが置かれているだけだった。

「……またダメか」

私は悔やみながらダンボールを「よっ」と持ち上げある。

店の方で開けてみると中にはたたくさんの本がビッシリ詰まっていた。

ここ、日高書店にはこうして本が届く。

生と死の狭間にあるこの古本屋に卸業者や買取り客が来るわけもなく、不定期に裏口のチャイムが鳴り、ダンボールが置かれている。

一体誰があんなところに封じた本の入ったダンボールを置いていくのか、そもそもこの本は一体なんなのか、私は何一つ知らない。

ヘイロウの浮いた天使さんか、トライデントを持った悪魔さんか、どっちにしたって一度は会ってみたいものだ。ここにきてから何度もチャイムが鳴ったらすぐに取りに行くようにしているんだけどまだ一度も誰とも会えていない。

ここにいる時の唯一の業務的な仕事は、こうして不定期に届く本たちをお店の棚に並べることだけです。本をそれぞれジャンルや種類ごとに棚に陳列していく。一時間もあれば終わるような簡単な業務のはずなのだが、本好きの性として、こうして並べている間に、目についた本で道草を食ってしまう。

そんなこんなでたっぷり二時間近くかけて本を全て並べていた。

そんなに動いていないつもりだけど、ほんのり甘いものが食べたくなるような心地いい疲労感があった。

最後の一冊。脚立に足をかけて高いところに本を差し込み、背表紙を指で押した時、ふと人の気配を感じました。

ガラ、ガラガラガラ……とガラス戸の重さにふんばりを利かせながら戸を開ける音と共に、一人の高校生くらいと思われる男性がやってきた。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

私は脚立から下りて、簡単にロングスカートについたほこりを払って声をかけた。高校生くらいの少年はどこか緊張した声色で返事をしてくれた。

少年は二階まで続かんとする本棚に呆気にとられながら、店内を見上げて歩き出した。「すげえ……」

思わず言葉が漏れ出てしまっている。恥ずかしいだろうから聞こえていないふりをする。しばらく店内を見回って、時より文庫本を手にしたりしていた少年は何度か私の方を窺うような素振りを見せていました。こちらから声をかけると彼は委縮してしまいそうだったので、あえて彼からの言葉をゆっくり待ちました。

すると覚悟を決めたように少年は「すみません」と私に向かって声をかけてくれた。

「ここって本屋ですよね」

「はい。見ての通り」

「あの、ある本を探してて」

「一緒に探しましょうか？」

「あ、あざっす……でも、その、文庫本とかじゃなくて……」

少年は一層緊張した様子で、まるで何かを恥ずかしむような、委縮した声で続ける。

「その、漫画なんです」

「ほう？」

「ヒ、ヒロアカなんですけど」

「僕のヒーローアカデミアですね」

「そ、そうです！ 見た限り、文庫本とか単行本ばかりで漫画とか見当たらず……すみません、そういうお店じゃないですよね」

「……………いや、ありますよ」

「えっ!？」

少し私が間を置いて口を開くと、少年は驚いた声を上げた。そりゃこの古そうな古本屋でそんな新しい漫画があるとは思わないだろう。ただまあ、厳密に言えばお店にはない。

「少し待っててください」

私は番台からお店の方ではなく、暖簾をくぐって裏の方へ行った。そこからは私の居室スペースだ。小さなキッチンを抜け、両手をつきながら急こう配の階段を上り、寝室へ入る。

お店の本棚を見てから見れば小さな本棚から青い本の文字が書かれた漫画を数冊手に取る。

「こちらですよね」

少年に見せると目をキラキラさせて「そうです！」とうなずいた。

「もしよかったら読んでいってください」

「え、でもこれ私物ですよね？」

確かに私物だ。個人的に、ここに来る前に好きだった本がここに来ると勝手に私物化していた。今のところ誰にも咎められてないし、だいじょぶだいじょぶ。

「あー、まあ、そうですね、大丈夫ですよもちろんあなたが気にしないのだったらすけど」

「ありがとうございます！」

少年は大きさに頭を下げると私の私物の漫画を手を取ってくれました。

立って読もうとしていたのでスツールを裏から出すと「どうも」と、小さく言っただけでくれました。

「お茶かコーヒー、どっちがいいですか？」

「え、ああ……じゃあ、コーヒーで」

「砂糖とミルクは？」

「い、入れてもらっていいですか？」

「もちろんです」

何も恥ずかしいことなどないのに、どこか照れくさそうに言うものだからなんだかかわいく見えて思わずこちらも笑みがこぼれる。

店の奥へ行き、すでに挽いてあるコーヒー粉をドリップする。少年の分の砂糖とミルクを入れたコーヒーを作りながら、なんとなく私にも砂糖とミルクを入れてみた。いつもは断然ブラック派なのだが、たまにはいいだろう。さらに今日はお茶請けに小ぶりのクッキーなんかも準備してみた。今日はそういう気分だ。

「ありがとうございます」

お店の方に戻り、少年のそばに甘いコーヒーとクッキーを差し出すと彼は短くお礼を言ってくれました。私も今日は彼が手に取らなかった昔のヒロアカに手を伸ばしました。

ちらりと彼の方を見ると、小ぶりのクッキーを一口で放り込んでいました。

クッキーを口に含んでいる間、彼は口元を抑えながら食べカスが絶対に本にかからないように食べていた。そこそこ長い時間口に含んで噛んでいたから、一口が小さい子なのかもしれない。

なのに汚すまいと食べてくれたのを見て少しうれしかった。

しばらくすると、鼻をすする音が聞こえた。

「ありがとうございます」

落ち着いた少年は、ヒロアカの漫画本を返しに来てくれた。目許は真っ赤になっていたが、もう十分彼の中で噛みしめられたのだろう。

「これだけが心残りだったんです」

漫画本を受取ると、少年は自分の気持ちを共有するように気持ちに言葉がついていくような話し方で話し始めた。

「中学の頃にハマって、『これ読み切るまで死ねえな!』なんて友達と笑いあってたんですけど……俺だけがそれをできずに死んじゃったから」

どこにでもいる漫画好きの少年の思い出話だった。

物語ではありふれたような昔話も、目の前にして聞くと文字だけで読むよりも何倍も心にジンと響いた。

今自分が感じている感動も衝動も、もう友達とは共有できないというのに、彼はすごくいい顔をしていた。

「お手伝いできたのなら、よかったです」

私でよければ意見交換くらいはしたいのだが、そんなことせずとも少年はもう十分といった清々しい顔立ちをしていて何も言えませんでした。

まるで私だけ取り残されているような気分になってしまったのは内緒です。

「あ、そういえば」

光の粒子に包まれた少年は、忘れていたとばかりに私の方を見て尋ねた。

「店主さんは、なんでそんな長い間ここにいらっしやるんですか？」

第四話

今日も今日とて、文庫本を番台で読みながら時より原稿用紙に目をやっていると、ガラッ、とガラス戸が開く音がしました。

「いらっしやい」

咄嗟のことで、反射的にそう口にしてしまいました。コンマ遅れて目がガラス戸の方を向いたのですが、そこに立っていた女性はこの二階まで貫かんとするほど本がならんだ店内を見て、少し嫌そうな顔をしていました。

「うわ、本ばっか……」

そう口にしてすぐ、女性は私の存在に気付いたのでしょう。ペコリと申し訳なさそうに頭を下げました。

私はポカンと呆けていました。

ここに来る人達は少なからず何らかの形で本に未練を残した人たちです。そんな人たちの中で、本を見て嫌悪するような人は初めてだったからです。そんな人も来てしまうんだと、なぜだかこちらが悲しくなりました。

三十代後半っぽい女性は本棚をぐるりと睥睨したのち、目の高さのところにある文庫の小説のところで立ち止まりました。

まるで考え込むように小説を見ていたので、私はせめてと思いい番台から出て彼女のもとへ静かに向かいました。

「何かお探ですか？」

「えっ、あ、いや……私、本読めないんで」

読めない。読まない、ではなく読めないと彼女は言った。

まるで逃げるようなその口調に、何やら明確な拒絶のようなものを強く感じた。

「……あのっ、もしよかったら簡単なもの見繕いますから、何か読んでみませんか？」

ここに来るってことは何かしら本に関して未練があるということだ。

幸い時間だけはたっぷりある。簡単なものから徐々にゆっくと本を楽しんでくれればよく思ってくれるかもしれない。

「……いえ、大丈夫です……」

女性は一歩引いた。

「そんなこと言わずに」

「結構です！」

「ッ———!?!」

今度はハッキリと大きな声で拒絶されてしまった。

まさかそこまで言われるなんて思ってもみなかったから私は情けなくも固まってしまった。こんな風に怒られたのなんていつぶりだろう。平積みしていた本に私がついていた文庫本を落としてしまった。

怖い顔をしていた女性は、私の顔を見るなりどんどん顔色を悪くしながら眉をハの字にしていきました。

「ああ、ごめんなさい！ 私っ」

「だ、大丈夫ですよ！ 私の方こそごめんなさい。無理やり勧められた本を読みたくないのなんて、小学生でもわかる感情ですよね……ごめんなさい」

読書感想文の宿題とかで無理やり指定図書を読まされて本に苦手意識を抱く子は多い。私も感覚としては分かっていたはずなのに、今こうして本で人を不快にしてしまった。本を人の手に取ってもらおう仕事を担っている者として恥ずべき行為だ。

「ここ、本しかない場所ですけど、ゆっくりしてってくださいね」

私はせめて刺激しないようにと、そうにんまり笑って番台に戻った。

そして逃げるように、また文庫本の世界にもぐりこんだ。

「あの、さっきはすみませんでした」

しばらくすると、女性の方から私に声をかけてきてくれた。

「いえ、あれは私もダメでした……」

私も同様に反省する。あんなこと、もう二度と起こしちゃだめだと、そう何度も胸に刻む。

「……あの、もしよかったら、店主さんの好きな本を何冊か見繕ってくださいませんか？」

「え？」

「リハビリしたいんです」

「リハビリですか……？」

「はい……私、色々あってもう自分がどんな本を好きだったかとかも、忘れちゃって」

それは私にはわからない感覚だった。ただだからこそ、彼女のリハビリしたいという気持ちには応えたいと思った。

「おまかせください」

私は番台から出て店内を見回る。

はじめは小説の方がいいだろう。それで、できるだけ読みやすいもの。そして分かりやすいもの、でもって面白いもの……そう聞くと難しいけれど日本の本はすごいもので今パッと本棚を見ただけで何冊かにすら手が伸びる。

『あ』

なんて探していると、私が過去にキャラに感情移入し、明確に好きだった本を見つけた。久しぶりに背表紙をみつけて思わず手にとってしまった。これもいいかもしれない。

「お待たせしました」

私は色々と厳選して、五冊の本を女性にお渡しした。

なんだか自分のセンスを問われているような気がして、すごく緊張した。

「ありがとうございます……あ、これは読んだことある」

表紙とあらずじを一冊一冊目で追いながら、三冊目でそんなことを口にした。

「……………あはは、おもしろそう……」

はじめて彼女は笑顔を見せた。

しかし、最後の一冊でストーンとその笑顔が消えた。

「えっ……」

女性は五冊目の本を手にして固まった。

「あの、この本」

それは私が昔明確に好きだった本でした。

「あ、この本は完全に私の趣味で好きな本なんです。私この人のデビューから好きです。ずっと読んでたんですけど、最後に出たこの作品がとくに大好きなんです。登場人物の心情が丁寧に書かれてて、それでいてリアルで、読んでて気持ちよかったです。でも、これの下巻がなかなか出版されなくて……………」

なんて饒舌に自分の感想ばかり話してしまって、思わずハッと女性の顔を窺った。

私はバカか！ ついさっき自分の気持ちだけで先行しないで誓ったばかりじゃない

か！ せっかく読もうとしてくれてる人にそんな風に詰め寄っちゃダメじゃないか！

「すみません！ 私、また」

「いいんです！ えっと、あの……」

女性は私の方を見て、言葉に詰まらせる。

「あの……これ、私の本、なん、ですっ……」

つまらせた先に出てきた言葉はにわかには信じがたい言葉だった。「私の本」というのが

仮に「私が書いた本」という意味なら、目の前にいるこの女性は

「え、じゃあ」

「はい。私、元作家の者です……」

どこか申し訳なさそうに作家さんの女性は目をそらしながらそう言った。

元作家先生の方には私は煎茶を用意し、スツールに座ってもらいました。

私もその隣に腰掛けて自分の分の煎茶を啜り、作家さんが話しやすい状況を作りました。

「……丁度その本でした。ご存じかもしれませんがものすごく酷評だったんです」
「あ……」

言われればそうだった気がする。心無い酷評に楽しかった本の記憶を塗り替えられるのが嫌ですぐに感想や評判を調べるのをやめてしまっていて、すっかり忘れていた。

「ただ酷評されるだけなら仕方ないんです。現に力不足を痛感した作品ではありませんし……でも、いつしか盗作を疑われて、ついには私自身の誹謗中傷にまで発展して」

そこまですとは知らなかった。本の売り上げにも関わるし、出版社がその手の情報に緘口令でも出したのかもしれない。

「それで書くのが怖くなって、いつの間にか書き方も忘れちゃって、思い出そうと昔の自分の作品や他の先生方の作品を読んだりしたんですけど、徐々に読むことも難しくなつて、気が付いたら本にもキーボードにも手が伸びなくなつて……」

作家さんの持つ湯呑が少し揺れ始めて、私はそつと手を添えた。

「……っ」

彼女に手を添えた瞬間、彼女の首元に縄のような痣が見えてしまった。これだけで辛い死因が分かつてしまつて、血の気が引く思いだった。

「……でも、最後にいい感想が聞けました」

それまで真つ青だった作家さんの表情に徐々に血の気が戻っていた。

「好きなんて言ってくれて、うれしかったです」

「ダメです……遅いですよ」

こんなところで私なんかの感想を聞いて満足なんてしないほしい。

作家さんに沿えた手から光の粒子がポツポツと出てくる。

言葉以上に作家さんが満足した証拠だ。

「こんなの、こんなのってないですよッ！」

「ありがとうございます。私のために、いや、私の代わりにそこまで怒ってくれて」

私が怒れば怒るほど、作家さんは笑顔になっていく。

作家さん自身も怒っていたはずだ。自分が盗作を疑われて、罵られて、自殺するほど追い込まれるような世界を。だけど彼女は怒り方を知らなかったんだ。

作家さんは手元にあった自分の本を手取る。

「よく出版できたものです。一体何人の作家志望の人が日本にいるか」

「それを勝ち取つても、最期がこんなんじゃない意味ない！」

「そんなことないんです。私は、私が生きた証を紙に残せたのがうれしい」

「そんなのっ！」

「あなただつてこの気持ちは分かるはずですよ」

私の言葉を遮って、作家さんは私の方を見上げた。

目の合った作家さんは本当に優しい丸い目をしていた。そしてその目は私ではなく、私の奥にある番台に向いた。

「あちらの原稿用紙、拝見しても？」

「えっ？ あ、あれはそういうんじゃない……」

番台に置いてある原稿用紙、たしかにそこには私の書いた文字がびっしり詰まっている。裏にはもっとたくさんあるが、あれはそういうんじゃない。

「あれは……日誌なんです」

「日誌？」

「はい。ここに来たお客さんのお話を、書いてるんです」

なぜ書き始めたかは私でも分からない。そこに原稿用紙とペンがあったからとしか言えないのだけれど、一度書いてみるといつの間にか日課のようになっていた。

「じゃああれは店主さんの書いた「小説」なんですね」

「ッ……!？」

毎日小説を読みふけて、一度だって書いてみたいと思わなかったわけじゃない。

でも改めて「小説」と言われて始めて気が付いた。あの原稿用紙は、私が書き連ねていた「日誌」は、「小説」だったんだ。

あの日誌を書くという行為は、すんなりと私の日常に馴染んでいた。

まるで昔からこうしていたように。

「読ませてもらっても？」

「え!? そんな、作家さんに読ませるようなものじゃ」

「作家だって人ですよ。むしろ読書欲は人一倍ですよ？」

作家さんは笑顔とは違う、ワクワクした好奇心に満ちた顔をしている。

「大丈夫です。こんな私です。講評なんてしません」

そう言う問題じゃない。

恥かしさとか、もどかしさとか困惑とか、色々あったけれど、物語を書いた人間にとって読みたいと言ってくれている人を拒む理由にはなりえない。

「……そういや、これタイトルとかあるんですか？」

「え、タイトルですか？ いや、そこそこ書いてから決めようかと思ってまだ決めてないです」

「うーん、さっき日誌って言いましたよね？ じゃあ「日高書店経営日誌」ですね！ っ
て、安直すぎですかね」

なんて冗談しかめて笑うこの人の書く本は本当に愚直なほど真っ直ぐなお話だった。

「いえ、憧れの作家さんから頂いたタイトル、大事にしますよ」

断る理由なんてなかった。

それから作家さんは私の小説、『日高書店経営日誌』を読んでくれた。そつと邪魔しないようにお茶のおかわりを注いで、私も作家さんの書いた本を読む。

しかしいつも以上に集中できない。

隣にいる人が私の小説を読んでいると思うと、一体どんな風に思われているのか、嫌な気持ちになっっていないか、面白く感じてくれているか、誤字脱字はなかったか、色々考えてしまっただけで気が気でなかった。

「……………『身体から光の粒子のようなものがぼつぼつと沸いてきました』って……………あ」
作家さんはふと、復唱するように私の文を口に出しました。

「これそう言う意味か」

自分の拳を何度か握って、自分の身体からぼつぼつと湧き出る光の粒子を見る。

「みなさん、その光に包まれていなくなっちゃいます」

「……………あの、あなたは？」

「え」

「日高さんは、なんでここにいらっしゃるんですか？」

それは自身の心に余裕が出来て、成仏されるほとんどの方から投げかけられる質問だった。

「……………それは……………私も分からないんです」

「わからない？」

「はい。いつからここにいるのか、なんでこんなところにいるのか、何も分からないんです」

もうずいぶん長い間ここにいるような気がするが、実際どれだけいたかは覚えていない。少なくともこの原稿用紙分はたしかだが、それ以上は青天井だ。

「私たちと同じだと思ってたんですけど」

「じゃあ私も本に何か未練があるのかもしれない……………詳細は全く分かりませんが」

「……………いや、案外分かるかもしれませんよ」

作家さんの言葉に私は首をかしげます。ふつと微笑む作家さんと目があうと、視界の端から光の粒子がふわふわ舞ってきました。

「えっ！ うそ、なんで」

その光の粒子は間違いなく私から舞って出たものでした。

光の粒子が出たことは私も成仏するってことだ。

本への未練を断ち切れたということになる。自分が何に未練を残していたのかも分かつ

ていないのに、未練が無くなるなんて妙な話だ。

私は情けなく、縫るように同じように光の粒子に包まれそうな作家さんに目を向ける。すると一つの可能性を思いついた。

「……………私、自分の書いた作品を読んでほしかったんだ」

もしそうだとすると作家さんに私の小説を読んでもらったうえで成仏しそうになっていることにも、ここにきてずっと本を読むだけじゃ成仏できなかったことにも、私が原稿用紙に向かい続けられたのにも、合点が行く。

そして何より他ならぬ私自身が、作家さんに小説を読んでもらったことをすごくうれしく思っていることが一番の証拠だ。

人に読んでもらうって、こんなにそばゆくて心地いいものなんだと初めて知った。

「きつと、日高さんの前世は物書きだったんですね」

「……………そうかも、しれませんがね。きつと成熟せずに死んじゃったんでしょ」

私はハハッと乾いた笑みをこぼした。

素人にしてはそこそこになっているとは思いますが、そんなのあくまでの自意識だ。目の前にいる読者の方がどう思っているかが全てだ。

「あの、これ」

勇気を振り絞り感想を聞き出そうとしたのだが、すでに目の前には誰もいなかった。残滓のような光の粒子が完全に消え入り、作家さんはもうそこにはいなくなっていて無事に成仏していた。

「……………」

これまでも誰かが成仏していつもの静かな部屋に戻ったことは何度もあったけれど、そのどれよりも虚無感が大きく、しばらく茫然と立ち尽くしていた。

作家さんはずいぞ感想は教えてくれなかった。

それだけつまらない話だったか、まだ判断できるほど読めていなかったか、どちらにしても後味は悪い結果に収まってしまった。

だけどそれでもよかった。誰かが自分の話を読んでもらった。それだけで救われる人だっている。

こんな時、救ってくれた人に、小説を読んでもらった人に、なんとさえいいか私は知っている。私の目の前にはもういないけれど、まだここまで読んでくれている人のために――

「読んでくれて、ありがとうございました」

2024年10月7日